蘇芳集

万愚節

髙橋　さえ子

起き抜けの顔しろじろと万愚節

地球儀とマスクメロンと卓の上

散策や草へ脱ぎたる夏帽子

にちにちの山気に乾く洗ひ髪

弟は短命夏至の夜が更けて

みんなみの日を奔放にヨットの帆

肩借りてゆく盆路の夕日かな

夏ひばり

青山　丈

八十八夜ドレッシングはイタリアン

藻の花の白いつか見た藻の花も

片蔭に昔むかしの匂ひかな

鳴くだけはしきりに鳴いて夏ひばり

一方へのみ遠雷となつて罷む

ほどほどの笊に青梅もらひけり

桜桃忌とか板チョコがやはらかい

紙の手ごたへ

木内憲子

ホチキスに紙の手ごたへ昼蛙
花冷の枡目枡目に稿の丈
亀鳴くやインクの染みを衣におけば
午後五時の長針かげる桜かな
まつたくの四月を文字に追はれけり
春暁のつかみてものの量感よ
花過の水辺にひらく己がこゑ

いつも

小島みつ如

行き先はいつも介護所朝桜
一瞬の花ふぶき受く送迎車
つつじ燃ゆバドミントンの一家族
をしべ見せびらかして緋のつつじ垣
からたちは実に白秋館は休み
また一人彼岸へ風の雪柳
伊勢ひじき煮る古里のかをり濃し

良寛忌

清水裕子

臘梅の香にゐて立子の忌と思ふ
白梅は日の香しばしを佇めり
一本に紅白の梅良寛忌
撫牛のずしりと座る春の凍
雨だれの音拾ひをり夜の椿
春服の古きが箱に収まらず
春の月光鍵盤に今差しかかり

春雷

下平直子

咲き初めのたちまち風の花辛夷
息かけて手鏡拭ふ花曇
跡継のなき家磨く夕桜
いつしかに身に添ふ母の春ショール
雨弾く丈となりたる春菜畑
物種を蒔く血縁のみな遠く
春雷の二声を聞き書に戻る

家居

真保喜代子

不穏なる世も花菜咲き桜咲き
疫病が花の盛りを横切れり
休校の校庭に咲く桜かな
何となく一日家に居る暮春
柿若葉家居つづきの眼にまぶし
牡丹の花弁らしく散りにけり
神社より夏越祓ひの通知来る

さくら

冨田正吉

きのふけふ明日へつづくさくらかな
さつきから桜に雪が降つてゐる
髭剃つて寒いさくらを通るかな
いつぽんの桜が雪となつてゐる
軽さうで重たたさうでさくらかな
風が来てしだれざくらがひらくなり
花の散るところに日暮来てゐたり

遠烏賊火

長沼三津夫

北窓を開き汽笛の間近とも
屋根替の大勢で来てはかどれる
霊山の曇ればくもる白椿
海鳴りの日々に落ち着く植田かな
売薬の出稼ぎ村の麦の秋
月明の潮の満ち来る遠烏賊火
激流をなほ遡る囮鮎

森は森—習作

野路斉子

待つとなく待つは泰山木の花
明日伸ばし出来ぬ泰山木が咲く
泰山木百花に朝の目覚めかな
泰山木は大樹何より花どきの
泰山木咲く橋青く祈りの灯
泰山木咲く小さくも森は森
泰山木の花散るかとも差して傘